

## 例会記録

## 日本医史学会 3月特別例会「大塚恭男先生をしのぶ会」平成22年3月27日(土)

順天堂大学医学部10号館2階カンファレンスルーム

1. 戦後の日本漢方医学界の展望 原 桃介
2. 大塚恭男先生の人と仕事 小曾戸洋
3. 大塚恭男先生の思い出  
日高三郎・大澤仲昭・岡田靖雄  
酒井シヅ・川瀬 清・花輪壽彦
4. ご遺族よりご挨拶

日本医史学会 4月例会 平成22年4月24日(土)  
順天堂大学医学部9号館2階8番教室

1. 扁鵲画像の変遷 天野陽介・小曾戸洋
2. 『断毒論』と『国字断毒論』  
『翻訳断毒論』の比較(漢方医学の立場から)  
西巻明彦

日本医史学会 5月例会 平成22年5月22日(土)  
順天堂大学医学部9号館2階8番教室

1. 第11回日本医学会と医学用語整理事業  
澤井 直
2. 巫者の病気観と治療  
一八丈島での事例から一 土屋 久

## 例会抄録

## 母乳をめぐる自然概念の歴史的変遷

梶谷 真司

「子供は母乳で育てるのが自然である」という主張は、歴史のなかで繰り返しなされてきた。しかし、これはけっして普遍的な真理を表しているわけではなく、そこで何を「自然」と見なすかは時代によって大きく異なる。しかもこの「自然である」という言葉は、たんなる形容詞ではなく、物事の正しいあり方を示す規範概念であり、その裏には常に何らかの批判対象がある。この批判されるべきものは、時代や社会によって異なるため、表面的に同じ主張であっても、その意味内容が変わってくる。この発表では、時期を近世(江戸)、近代(明治から高度成長期前)、現代(高度成長期以降)に分け、時代ごとに何をどう理由で批判するために「自然」がもち出されたのか、他のどんな種類の乳に対して母乳を与えるのがよ

いと言われるのかを、医者の書いた育児書を手がかりに考察した。

まず江戸時代についてであるが、母乳について医師が「自然」をもち出すとき、それは何よりも乳母に対する警戒と結びついていた。そのさい問題であったのは、母親としての愛情や義務ではなく、乳母という卑賤な身分の気血が、乳を通して子どもに影響し、体質のみならず、気質、品性までが劣悪化することへの危惧であった。ここでは、身分差を不用意に侵犯しないことが「自然」なのである。さらに江戸時代には、生まれた子供に初めて与える乳は他人からもらう「乳つけ」という慣習があった。これは、実際的には、出産後乳が出るようになるまでの代理授乳の面もあるが、共同体の絆の中で子供が丈夫に育つための願

掛けを兼ねていた。また乳母の場合とは異なり、同質な集団への帰属（親族や生活レベルの似た人）という意味合いもあった。しかしこれについても、医師は批判的だった。その背後には、天の理に対する過剰な信頼がある。すなわち、母親が自分の乳で子を育てるのが天の計らい、自然の摂理である以上、出産後すぐに乳が出ないのもやはり自然の摂理であって、もともと他人の乳など不要であって、子どもがどれほど泣こうと、最初から母親の乳が出るのを待って授乳すればよい、というわけである。ところが当時は胎毒説により、誕生後すぐの授乳は忌避され、また、母親の初乳には毒があるとされていた。それが江戸の終わりがちになって、やはり「自然」の名のもとに、初乳が胎毒下しと位置づけられ、ようやく母親が初めから乳を挙げるのが「自然」なことになった。このように江戸時代、母乳の「自然」は、血縁や身分差、胎毒説や初乳の毒性、気血思想など、種類の異なる要因がいくつも絡み合い、不調和を抱えたままだった。

近代、すなわち明治時代になると、育児書の母乳に関する考え方は、一気に西洋化する。初期はヨーロッパの育児書の翻訳だったが、やがて日本人の書いたものが出てくる。そこにも乳母による授乳に対する批判は出てくるが、江戸時代のように身分差はさほど問題にはならない。それに代わって登場したのは、母乳—乳母の乳—牛乳—コンデンスミルク—粉ミルクという乳の質的序列、さらには、それを大きく二つに分ける「人乳」と「獣乳」というカテゴリーである。そうして人乳による授乳は「自然哺育法」、牛乳その他による授乳が「人為哺育法」と呼ばれて対比された。つまり明治期、人間の間的身分差ではなく、動物としての種差を侵犯しないことが「自然」とされたのである。ただしこの時期、不自然な獣乳に対する警戒感、それほど強くない。人の乳より動物

の乳が死亡率や疾病率の点で危険なことは、統計的には明らかだった。しかし近代日本においては、西洋志向の大きな流れの中で、そうした危険は顕在化せず、母乳の「自然」はただ「よりよいもの」という緩やかな意味で捉えられていた。

こうした傾向は、戦後の高度成長期まで続いた。戦後の民主化、大衆社会の出現により、乳母を雇う習慣がなくなり、人工乳の生産技術が進歩し、規模が拡大すると、牛乳が代用乳として使われなくなった。その結果、母乳と粉ミルクの二項対立が前面に出て、生身の肉体が「自然」とされ、科学技術と産業資本主義の生み出す工業製品、およびその背後に広がる巨大で複雑な社会システムと対峙することになった。こうした現代の構図のなかで、母乳の「自然」は、自然一般と同様、科学によって強く規定される。そして科学は母乳の価値を高める一方で、代用乳の質をも向上させる。また、産業資本主義は、それが作り出す粉ミルクの基盤であると同時に、私たちの生存そのものの土台でもあるため、この社会で確保しうる母乳の「自然」も、そこに依拠して初めて成立しうる。このように現代における母乳の「自然」は、それ自身のうちに幾重にも矛盾と葛藤を孕んでいる。

どの時代の「自然」も、けっして普遍的なものではなく、その時代の歴史的・社会的条件によって規定されている。ただしそれは、つねに変わることなく規範概念、言い換えれば、真や善の「抛り所」として機能してきた。だからこそどの時代にも、直面するさまざまな困難や問題を乗り越えるために、私たちは繰り返し「自然」に回帰する。しかし何が「自然」なのかは、はじめから決まっておらず、社会的・歴史的コンテクストのなかで、直面した問題から反照されてようやく具体化するのである。

（平成21年11月例会）